

## 【慢性肝炎の治療薬】

インターフェロンはウイルスに感染した際、体を守るために体の中で作られる物質で、ウイルスの増殖を抑える働きがあります。しかしウイルス性肝炎の患者様は、体内で作る量だけでは肝炎を治すことができません。そのためインターフェロンを注射し、肝炎ウイルスに対抗できるだけのインターフェロンを補います。

インターフェロンは**B型慢性肝炎**と**C型慢性肝炎**の治療に使用されています。特にC型肝炎の治療では、B型肝炎よりも効果を発揮します。治療を行った人のうち、約30%はウイルスの排除に成功していますし、約50%はGPT値を正常値近くまで下げることができます。C型肝炎ウイルスの場合、インターフェロンは人によって効き方が違います。また最近では、より治療効果が高いと言われているインターフェロンと**リバビリン**(商品名レベトール)を併せて使用することが、C型肝炎ウイルスの量が多い方や、以前インターフェロンを使用して効果が無かった方、再度悪くなった方に勧められています。

**インターフェロンの副作用**でよく現れるのは発熱、だるい感じ、頭痛、筋肉痛ですが、多くは2～4週間で良くなります。ひどくゆううつな感じや、ある種の肺炎、血液の異常が起こった場合には適切に治療が行われますが、症状にあわせて対応しますので心配いりません。

B型慢性肝炎の治療薬に**ラミブミン**(商品名ゼフィックス)があります。ウイルスの増殖を抑える薬です。ウイルスの検査をして治療が開始されます。**強力ネオミノファーゲンC**注射は生薬の「甘草」から抽出されたものです。肝臓の炎症を抑える作用を持っています。

(薬剤師 中川 義浩)

## 【肝臓病の食事】

肝臓病の食事といえば、「**高蛋白・高カロリー**」と思いこんでいる方も多いようです。しかし、現代の食事傾向を考えると日常の食事がすでに「**高蛋白・高カロリー**」となっているため、さらに蛋白質・エネルギーを増やす事は、肥満や脂肪肝の予備軍をつくりかねません。しかし、蛋白質は肝臓が最も必要とする栄養素であり炭水化物も肝臓にグリコーゲンとして蓄えられ肝細胞の活動には欠かせない重要なエネルギー源であることも事実です。このため「**適正十分な蛋白・高ビタミン・適正カロリー**」が基本となると思います。このために最低限のルールとして偏食は避けたいものです。

食事の内容はもちろんですが、食べ方も重要です。例えば、夜型生活のため朝はギリギリまで寝て朝食抜き、仕事に追われて昼食をすすする程度、夕食でやっと本格的な食事をとる、が日常の食生活のパターンになっていないでしょうか？朝食を抜くことは午前中の活動エネルギーとして肝臓に蓄えられたグリコーゲンを取り崩して使う事になります。グリコーゲンは肝臓自身の再生エネルギー源ですからますます負担をかけることになってしまいます。

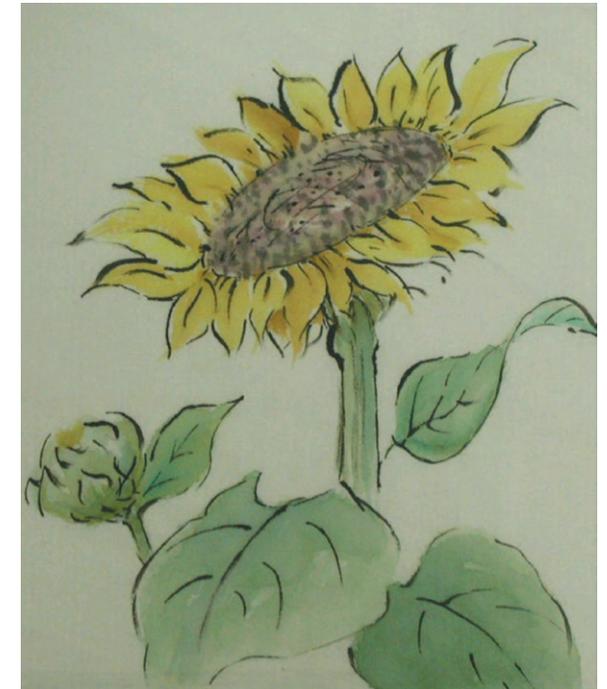
**食事療法**は、決して特別なことではありません。重要なことは、三食をきちんと食べること、主食・副食があること、副食には蛋白源と野菜がふくまれていることです。まずは、何かひとつから実行してみたいはいかがでしょうか。

(管理栄養士 橋本 有吏)

# くす通信

第46号  
2002.5.1

## 肝臓病について 慢性肝炎の治療薬 肝臓病の食事



くす(樟)は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。また、くすし(薬師)とは、医師のことを指し、くすしぶみ(薬師書)は医術に関する書物のことを言います。本紙はこのくすにあやかり、健康な生活を送るために情報を提供します。気楽に読んで健康を守りましょう。

**診療時間 8:30~17:00**

**(診療受付時間 8:30~11:00)**

ただし、急患はいつでも受診できます。

(診療科目) **総合医療センター**(総合診療科、血液・膠原病内科、内分泌・代謝内科、腎臓内科、神経内科、呼吸器科)、**心臓血管センター**(循環器科、心臓血管外科)、**消化器病センター**(消化器科)、**救急医療センター**、精神科、神経科、小児科、外科、小児外科、整形外科、脳神経外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、**感覚器センター**(眼科、耳鼻咽喉科)、気管食道科、リハビリテーション科、放射線科、麻酔科、歯科・口腔外科、人間ドック、脳ドック

## 消化器病センター



外来診察は、月曜日から金曜日まで毎日おこなっており、木村、前田、加茂、中園、松岡、杉の6人の消化器内科医が2人ずつ交代で診察に当たっています。

**診療内容**としては、

消化管疾患、肝臓病、胆嚢胆管疾患、膵臓病をはじめ消化器病全般を幅広く扱っています。診察以外に**上・下部消化管内視鏡検査、腹部超音波検査、消化管造影検査**を毎日行っています。下痢、腹痛、消化管出血等の頻度の高い疾患の診療はもとより、特に、B型・C型慢性肝炎、肝硬変、肝がんやピロリ菌関連胃十二指腸潰瘍については**新しい診断法および治療法**を積極的に導入して診療に臨んでいます。

## 【肝臓病について】

**肝臓**は体重の約50分の1を占める体で最も大きい臓器です。消化管より吸収された栄養素の代謝、老廃物の排泄、薬物の解毒、消化管からの感染防御等、重要な働きを担っています。

**肝臓病**ではこれらの働きに異常が生じた結果、食欲不振、倦怠感や尿濃染などの症状が出現します。近年、消化器病における肝臓病の占める割合が増加傾向にあり国民の関心が集まっています。今回は、肝臓病の中でも大きな位置を占める3つの病気についてお話ししたいと思います。

**脂肪肝**：健康診断で肝機能異常と判定されたかたの多くはこの病気です。肝細胞に**中性脂肪**が沈着し、**肝機能異常**が生じます。**腹部超音波検査**が診断に有用です。原因としては肥満による過栄養性のものが大半を占めていますが、糖尿病、アルコール性肝臓病、内分泌(ホルモン)疾患が潜んでいることもあります。

**ウイルス性肝炎**：半年以内に治る**急性肝炎**と長年にわたり持続する**慢性肝炎**とに分けられます。原因として**B型肝炎ウイルス(HBV)**と**C型肝炎ウイルス(HCV)**が9割を占めています。HBVに小児期で感染すると**持続感染**となり、大部分は無症候性に経過しますが約10%は慢性肝炎を発症します。成人の感染では20%~30%が発症し、約1%が**劇症肝炎**と呼ばれる重篤な肝障害を発症する以外は

急性肝炎で終わります。

HCVでは急性肝炎の60%~70%が慢性肝炎へ移行し、多くが**肝硬変**に進展し、**肝がん**を併発することがわかっています。近年これらウイルス性肝炎に対する特効薬が開発され用いられるようになりました(次項)。

**肝がん**：ほとんどが**ウイルス性肝硬変**に合併します。治療法の進歩により早い時期のものであれば完治します。それでもしばらくしてから新たな病変が再発することがあり、定期的な診察を受けることが必要です。現在肝がん抑止計画が全国規模で進められています。肝臓病があってもその症状が出現する時は病状がかなり進行した時期です。これは肝臓が沈黙の臓器と呼ばれる所以でもあります。そのため発見が遅れ、治療に難渋することがしばしばあります。

**健康診断**で肝機能に異常があると判定されたかたや肝臓に不安があるかたは、いつでも**消化器病センター**をおたずね下さい。適切な診断と治療ならびに生活指導等をご提供いたします。

(消化器病センター超音波診断室長 杉 和洋)



国立熊本病院

〒860-0008 熊本市二の丸1-5

電話 096(353)6501(代表)

FAX 096(325)2519

ホームページ <http://www.hosp.go.jp/~knh>